

幼児期における乳児に対する養護性 (nurturance) 測定法の検討 —幼児が乳児をどうとらえているか—

日本女子大学 糊澤 令子

Study to measure nurturance for infant in preschool children How is a preschool child recognizing the baby?

Japan Women's University KURUMISAWA, Reiko

要約

本論文は、子どもの養護性 (nurturance) を探るための方法を作成し、その方法について考察を加え、検討することを目的としている。子どもの養護性を測定するために、幼児が乳児をどのようにとらえているかを探る「面接課題」と絵の「選択課題」という2領域からなる測定方法を作成した。対象は、3歳児から5歳児の保育園児39名であった。実施した研究手法・手続きについて、妥当性等の検討及び測定されたカテゴリーの日米比較、エピソード等中心に考察を行い、今回の幼児に対する養護性測定方法はある程度妥当な方法であると結論付けた。

【キー・ワード】 養護性, 測定方法, 幼児

Abstract

This paper has aimed to make the method for the search for child's nurturance, and to add consideration of the method. To measure the child's nurturance, the method of two areas ("Interview method" and "Selection method") was made. Subjects were 39 nursery school children three years old and 5 year olds. Executed studying method and procedure are considered to inspect Validity and to compare Categories of Japan-U.S., and to considered episode. This paper concluded that this measurement method of nurturance was appropriate to some degree.

【Key words】 nurturance, measurement method, preschool child

問題と目的

子どもの養護性に関する先行研究

養護性 (nurturance) は「相手の健全な発達を促すために用いられる共感性と技能」と定義され (小嶋, 1991), 大人になって子育てする際に顕在化するのではなく, 小さい頃から育まれていくという

生涯発達の視点を含んでいる。しかしながら、幼児期は育てられる立場であり、育てる立場を想定することが少ないこと、「発達を促す共感性と技能」=子育てというイメージが先行しやすいこと、主にこの 2 点から青年期や成人期における子どもに対する養護性の研究が比較的多く行われ、幼児期の研究はほとんど行われていない。

養護性の萌芽期となる幼児期や児童期の研究は、小嶋（1987）が小学 2 年生と 5 年生に対して養護性と関わる生態学的な調査や、その先行研究として行われた Fogel ら（1986）の研究など、数少ない。

小嶋・河合(1988)は、年中児（5 歳）、小学 2 年生、小学 5 年生の親に質問紙調査を行い、養護性がどのように変化するかを研究している。その結果、年中児では赤ちゃん、妊娠した母への関心、自分の小さい頃の話を書くなどの行動を示すが、小学 5 年生になるとそのような養護行動は少なくなっていく、逆にペットと遊んだり、自分の洋服や持ち物などを手入れしたりするといった養護行動が、小学 5 年生にかけて多くなると示している。特にペットなどの生き物への養護行動は、男児では増えてくるようだ。年齢があがると赤ちゃんに触れる機会が減少することや、友人関係に重さが置かれることといったように、それぞれの年代での関心事が異なってくるのが影響しているだろう。このように、年齢が高まると、子どもの関心が乳児（赤ちゃん）領域以外の領域に向くようになると考察されている。また、きょうだい関係の中での養護性の研究では、上（兄姉）から下（弟妹）へという養護的な行動だけではなく、下（弟妹）から上（兄姉）へという養護的行動も見られるという結果を得ている。これらのことから、養護する（したい）対象が年齢とともに変化することなど養護性概念を説明している。

さらに、子どもの養護性の中でも、相手を「乳児」に限定した研究もある。Fogel, Melson&Toda, Mistry (1987), Fogel&Melson (1989), は、2 歳から 6 歳までの幼児が母の励ましにより見知らぬ乳児に対して働きかける活動状況を観察した結果、性差は見られず、どの子どもも養護能力を持つことを示した。さらに、弟妹のいる子どものほうが乳児や自分の乳児時代について質問し、乳児が泣いていると気がかりな様子を見せた一方、末子やきょうだいのいない子は、下にきょうだいがいる子よりもペットとよく遊んでいた結果が得られている。

また、乳児への関心や知識を就学前児と小学 2 年生にインタビューした研究(Melson, Fogel&Toda, 1986) では、赤ちゃんの特性を選択させ、述べさせた結果、「赤ちゃんは弱いものだからお母さんや大人が必要だ」ということを幼児も十分理解していることが分かっている。さらに、弟妹のいる小学生のほうが他と比べて、赤ちゃんに関する知識やその扱いの知識が多かったことを示している。これらの研究のように、幼児の乳児に対する知識や養護能力はあり、きょうだいの地位などが差異の要因となっているようだ。

いずれにしても、子どもの養護性研究は、ここにあげた研究以外にはあまり見当たらず、さらなる追究が必要と考えられる。

子どもの社会性の測定方法

幼児における相手の理解に関する研究としては、他者の内的特性の理解（松永、1995,2002）や、相手への共感性（渡辺、瀧口、1986）などの研究があげられる。これらの研究では、幼児の内的特性

をとらえるために、絵などの紙芝居や VTR などが用いられ、その反応数が検討されている。実験方法としては、幼児が分かりやすく、緊張なく答えられるといった利点があるために、こういった方法が好まれて使われている。また、子どもの内的世界を測定する方法としては、人形や絵などで表現したものを測定する投影法や、子どもの生の語りを観察してそれを分析する方法が用いられることが多い。

そこで、今回は、幼児にとってわかりやすく負担の少ない課題として、絵の選択課題を作成する。これは、検査者にとっても採点がしやすく数量化しやすい。一方で、それとともに面接課題を設定し、子どもたちの自由な発言を分析対象とすることで、子どもが乳児をどのようにとらえているかを探る。面接課題と選択課題という両方向から、子どもの養護性にアプローチをすることで、この 2 領域において類似の結果が出れば妥当性・信頼性もあると考えられるのではないかと考えた。本研究では、幼児期の乳児に対する養護性を測定するための方法を作成し検討することを目的とする。

方 法

対象者 Y 市の 2 保育園で実施。3, 4, 5 歳児クラスの保護者に対して、面接・実験への協力を求める文書を配布。同意書の得られた家庭・児に対してのみ行った。3 歳児クラス 12 人、4 歳児クラス 14 人、5 歳児クラス 13 人の計 39 人。

また、同意の得られた保護者に対して、対象児のきょうだい有無の状況や乳児・祖父母との接触経験などを問う質問を行った。4 歳児クラスの一人を除く全員が録音可としたため、面接のやりとりを録音した。録音不可とした子は記録を記入しながら行った。

調査期間 2010 年 1 月～3 月

手続き 養護性測定は下記の 3 領域からなる。子ども 1 人につき、約 15 分前後の課題実施となっている。個室で行い、主任の先生が同席した。

- ①**言語課題** 言語理解が可能であるかチェックを行った。(例：石・スポンジ・保冷剤の中から「つめたいもの(柔らかいもの)はどれ？」など)
- ②**面接課題** 課題の提示 提示の仕方は、先行研究 (Fogel 1989) の一部と同様に行っている。乳児 (7 か月くらいの座位の乳児) の絵を含む 3 枚の絵から乳児を選択してもらい、「そのカード(乳児)について知っていることを教えてください」(Ⅰ：乳児の特徴) と続けた。さらに、老人、成人、対象者と同性的な子どもの絵 3 枚から、乳児の世話をする人を選んでもらい、「そのカードの人は赤ちゃんにどんなお世話をしますか？」(Ⅱ：乳児の世話に関する知識) と尋ねた。次に、「あなたは赤ちゃんに、どんなお世話をしてあげられますか？」(Ⅲ：自分ができる世話) と尋ねた。さらに、乳児の表情(「泣く」「笑う」「怒る」表情理解) 及びその表出の理由を尋ねる問題も行った。
- ③**カード選択課題** 祖父母、父母、同性的な子どもの 5 枚の絵を提示し、世話が上手な順位をつけてもらった(世話の上手な「順位」)。さらに、乳児やその世話に関する質問に対して「選択問題」として 3 つのカードの中から、答えを選んでもらった。質問は全 8 問からなる。例えば、「赤ちゃんが使うのはどれですか？」とあって、パンツ・オムツ・ズボンの絵から選択させる課題などがある。

3 択のうち一つを正解 (1 点) として採点し、正解数を分散分析した。(資料にカード課題の一部を添付する)

結果と考察

1. 言語課題

PPVT (Peabody Picture Vocabulary Test) などの言語発達検査を行うことで、言語表出が言語発達の影響を受けていないかを検討する必要がある。しかし、本研究においては、面接課題は幼児の自由な発言に基づくため、選択課題においてのみ、検査者側の提示することばの理解が可能かを確認する程度に行った。言語の確認と、ラポールをつけるための導入という 2 点の意味で、正負の影響はなく、むしろ子どもの自由な発言を引き出すには有効ではないかと考える。この言語課題に関しては、正答率は 99% でほぼすべての子どもが理解していると判断された。また、間違った場合においても、本人がすぐに気付いて訂正している。

2. 面接課題

カテゴリー抽出とマトリクスの作成 課題Ⅰ～Ⅲは、それぞれ分析は以下の手順で行った。1) 面接の録音記録を逐語記録としてかきおこした。2) コーディング作業: その各部にラベルをつけ、ラベルを類似性に従って分類した。言及データの評価に関するカテゴリー (以下、カテゴリーとする) を生成し、カテゴリーリストを作成した。さらに、3) 全逐語を読み直しカテゴリーに分類しながら、当てはまる言及をカウントし、課題ⅠからⅢについて、個別にまとめマトリクスを作成した。39 名分のマトリクスを、筆者の他発達心理学を専攻している博士課程後期の大学院生 2 名が行ったカウントとの一致率を求めた結果、39 名×3 課題の一致率は、.79～.10 で、各課題一致率の平均 .96, .99, .99 で高い一致率を示していた。高い一致率が得られたため、さらにカウント数を数量分析した (数量分析結果について、本論文では省略する)。

先行研究のカテゴリー分類による日米比較 ここでは面接課題Ⅰ (「(赤ちゃんについて) 知っていることを教えてください。」) の結果のみをとりあげる。本研究で抽出したカテゴリー分類は、先行研究のカテゴリーとやや異なる結果となった。面接課題Ⅰの「(赤ちゃんについて) 知っていることを教えてください」という教示に対する本研究の発言数は 117 であり、そのうちの 37 (29%) が先行研究のカテゴリーに当てはまらず、新たなカテゴリーとして分類された。本研究で特徴的だったのは、「抱っこ (されている)」という表現である。先行研究ではカウントされていないが、本研究幼児の発言で多く、「おんぶ」といったことばと同様、新たに「赤ちゃん行為」としてカテゴリー化した。また、本研究幼児の場合、ベビーカーやよだれかけなど、赤ちゃん用品に関する発言も比較的多いため「赤ちゃん用品」というカテゴリーが作成された。

さらに、先行研究カテゴリーにあてはまる残りの内容を先行研究カテゴリーに基づき分類し、割合を出した (表 1)。その結果、先行研究の場合、「赤ちゃんらしさ」の言及割合、本研究の場合、「運動」の言及割合がほぼ同数で、他のカテゴリーは類似した結果になった。この結果から、多い言及が異なるのは、何らかの文化差が生じていると予想される。しかし、「遊ぶ」「泣く」「口唇の動き」へ

表 1 先行研究カテゴリーの日米比較

カテゴリー	先行研究 (Fogelら)	
	内容	米 日
プラスの情動	ほほ笑む, 笑う	1 4
運動	歩く, 走る, ける, 這う, 動き回る, 寝返り, 横になる, 身動きする, しがみつく	16 36
攻撃	かむ, 髪を引っ張る, 喧嘩する, 怒る, つねる	4 4
口部の行動	(食物)かむ, 数, 舐める, 食べる, のむ, 舌を出す	14 19
発音	音を出す, 喃語	3 6
遊び	遊ぶ, 物をつかむ	12 6
状態	眠る, 泣く	8 11
赤ん坊らしさ	小さい, 背が低い, 髪がない, 耳の形, おむつ, 目が輝く, つまづく・転ぶ赤ん坊は何も分からない	40 14

注:「割合」とは全発言に対するカテゴリーの発言数の割合

米国内データはコード不能反応が2%あるため, 合計100%にならない。

カテゴリー・内容は「乳幼児の社会的世界」p180の表8-3に基づく。

の注目は, 文化差に影響を受けず, 共通した乳児の特徴のとらえとなっているだろう。また, 先行研究の「赤ちゃんらしさ」には「オムツ」が入っているが, 本研究では「オムツ」を「赤ちゃん用品」カテゴリーに含むため, 単純比較できないが, 本研究幼児は, 「赤ちゃんらしさ」を赤ちゃんのグッズ・用品に見出している部分があるとも考えられる。

子どもの発言エピソード 本研究においては, 面接課題・選択課題において, 1対1で対面して行っているため, 子どもの自由な発言が聞かれている。5人きょうだいの3番目, 5歳男児Aくんは, 赤ちゃんについて, 「立って歩いたり, しゃべったり。追いかけてっていたり, そういうことをするの。9時になったら必ず『ねんね』って泣くの。ご飯食べると怒ったりするし。おかあさんが逃げるとすぐ追いかける (『後追い』のことを指している)。お母さんが怒ると他の人にすぐ逃げる。」と発言している。Aくんは, きょうだいに恵まれている部分もあるが, 赤ちゃんの様子を, 実際の行動, 生活の流れ, お母さんと赤ちゃんとの関係という様々な視点で発言してくれている。

また, 妹のいる4歳男児Bくんは, 「歩けない。夜ごはん朝ご飯はミルク。赤ちゃんはママに抱っこしてもらおう。2歳になったら, 歩けるけれど, 0歳は歩けない。小さいよね。かわいい。」と発言している。「〇歳になったら～できる」など, 赤ちゃんが同じ状態にとどまらないことを知っているようである。他にも, 「赤ちゃんはおなかの中でお母さんとつながっていたこと」や, 「ママが赤ちゃんほしがっている」「今ママのおなかに赤ちゃんがいる」「男か女か, 決めるのは, 神様」という報告など, 赤ちゃんはお母さんのおなかで育ち生まれてくることを, 実際の弟妹の誕生の経験や, 親子での会話を通して理解していくようである。

今後の課題 カテゴリー分類後の評定では, 他の研究者とともに評定が正しいかどうかを, 一致率を用いて確認し, マトリクスにおける量的分析を正確に行えるものとなっている。幼児の発言は評定

しやすい部分もあり、一致率が高かった。面接課題Ⅰ～Ⅲについて、それぞれ量的分析を行い、さらには、その結果が、きょうだい数による影響があるのか、性差の影響があるのか、年齢による影響があるのかなど考察する予定である。

3. 選択課題

選択課題の分析結果は、本論文では省略するが、選択課題における子どもの反応は、3歳児クラスの幼児でも選択可能で、比較的スムーズに行えていた。また、選択課題は「赤ちゃんのすきなものの選択（牛乳、ジュース、哺乳瓶（ミルク）」は殆ど正答できる場合が多いが、後半の設問「赤ちゃんが最も心地よいと思うだっこの形の選択（縦抱き、横抱き、荷物持ち）」という相手の立場に立った答えを考えるとという設問では、回答にばらつきがみられ、これらが全体の総合得点に影響をしていると考えられた。

また、今回の各選択課題（3択）で「だっこ」「喜ぶこと」を順位づけてもらったが、1位となったものが、検査者側の考える正解と一致していた。このことから、選択課題はある程度妥当な問題であると考えられる。

子どもが選ぶ「赤ちゃんのお世話が上手な人」 今回のカード選択課題の中に、祖父母、父母、友（自分と同性）の5枚のカードから「赤ちゃんのお世話が一番上手な人はだれ？」と順位づけていくという課題があり、結果、「母>父>祖母>祖父>友」と認識していた（ $\chi^2=67.86$, $p<.001$ ）。幼児からみて、男性より女性のほうが、また老人より成人のほうが、赤ちゃんのお世話は上手だと考えているようである。さらに、分析の対象外であるが、世話の子どもの発言に注目すると、カードを選択する際にも子どもなりの理由づけが生じていた。5番目に祖父を選んだ5歳男児は、「おかあさんが、じいちゃんはミルクをやるのが下手だったって、よくいっていた。だからじいちゃんは5番目」とか、5番目に友達を選んだ5歳男児は「この子は、あかちゃんのこと、あまり詳しくない。おなか痛くたたきすぎちゃうとか、いけないことしたからって怒り過ぎると（赤ちゃんは）泣いちゃう」といった、幼児なりの理由づけが聞かれた。

4. 課題間（面接課題と選択課題）の関連性

今後、面接課題の下位領域と選択課題との分析を行う予定ではあるが、面接課題と選択課題の結果が一致すること（例えば、年齢差が一致してみられるなど）が期待される。

今回の面接課題では、発言を数量化し、年齢や性差による内容の差異を検討することが可能であり、それがどんな要因による影響であるのかを検討することができる。さらに、選択課題では、発言が拙くあってもある程度の理解があれば選択することは可能であり、幼児がどの程度理解しているか確認できる。また、面接課題と選択課題の相関等も分析し、測定方法の有効性を検討したい。

5. 子どもの反応

個室での設定であったが、全般的に緊張は高くなく、自然な発言を見せてくれる子どもが多かったと思われる。よく話をしてくれる子どももおり、分析対象にはならなくも、「オムツをはくから、老人も子どもも一緒だ」といった発言など、その思考の裏側にある子どもの論理を興味深く感じる場面も多かった。3歳児には、導入部分にどこかに行った話など気楽に話していたものの、赤ちゃんのことを聞き始めると、「わからない」と黙ってしまう子どもも見られた。今回の場合、面接課題が先に

行われるため、発言がない場合のこういった子どもには、選択課題があったことで、緊張が高いまま終わるということはなかったように思われる。

付 記

調査にご協力いただきました、2 保育園の子どもたちと保護者の皆様、場所や時間を提供して下さった保育園の園長先生をはじめとする諸先生方に、厚く感謝申し上げます。

引用文献

- Fogel,A.D&Melson,G.F&Mistry,J. (1986). Conceptualizing the Determinants of Nurturance, A Reassessment of Sex Differences. In Fogel,A&Melson,G.F(eds),Origins of nurturance(pp55-67). Lawrence Erlbaum Associates.
- 小嶋秀夫・河合優年.(1987). 幼児・児童における養護性発達に関する心理・生態学的研究 昭和 62 年度化学研究費補助金・研究成果報告書.
- 小嶋秀夫.(1989). 養護性の発達とその意味：小嶋秀夫（編）. 乳幼児の社会的世界, 有斐閣選書. pp.187-204
- 小嶋秀夫.(1991). 親となる過程の理解：我妻 堯・前原澄子（編）.母性の心理・社会学, 医学書院. pp.79-111
- 松永あけみ. (1995) .幼児における他者の内的特性の把握と行動予測能力.教育心理学研究. 43 204-212
- 松永あけみ.(2002).幼児は他者の内的特性をどのようにとらえるのか. 発達心理学研究.13. 168-177
- Melson,G.F,Fogel,A,and Toda.S. (1986) Children's Ideas about Infants and Their Care. Child Development, 57,1519-1527.
- Fogel,A,Melson,G,F,and toda.S,Mistry,J (1987) Young Children's Responses to Unfamiliar Infants:The Effect of Adult Involvement. International Journal of behavioral development. 10,37-50.
- 渡辺弥生・瀧口ちひろ. (1986) . 幼児の共感と母親の共感との関係. 教育心理学研究,34,324-331

資料 (実際に実施したカード選択課題の一部)

カードは全てタテ 18 cm, ヨコ 13 cmの白い紙に, 一人ずつ, 一つずつが描かれている。白黒。

<選択課題>

① 赤ちゃんがするのはどれ?	あるく, はいはい, はしる
② 赤ちゃんはどんな感じ?	やわらかい, かたい, つめたい
③ 赤ちゃんはどれが好き?	哺乳瓶, 牛乳, ジュース
④ 赤ちゃんはどれをはくかな?	オムツ, パンツ, ズボン
⑤ 赤ちゃんのすきなおもちゃは?	ガラガラ, ボール, つみき
⑥ 赤ちゃんの大きさ。あなたより赤ちゃんは?	小さい, 大きい, 同じくらい
⑦ 赤ちゃんが気持ちいいと思うだっこはどれかな?	横抱き, 縦抱き, 荷物持ち
⑧ 赤ちゃんはどれが(一番)喜ぶかな?	いないいないばあしてもらうこと, 絵本をよんでもらうこと, 一人にされること

赤ちゃんが, 一番喜ぶのはどれかな?

